今週の
倫理

2月のテーマ　|　病は赤信号

2026.2.6～2.13

1476号

心の暗影を断ち
朗らかな心で再起を果たす

Ｉ氏が経営していた飲食店は、数年前から業績が悪化し、金融機関からの融資も次第に難しくなっていました。やがて資金は底をつき、倒産の瀬戸際に立たされました。

Ｉ氏は「好調な時はいくらでも貸してくれていた金融機関も、業績が傾けば皆去っていく」と嘆き、心身の不調まで表われるようになっていました。

それでもＩ氏は、一縷の望みをかけ、新たな土産商品の開発と販路拡大の事業計画を携えて複数の金融機関を回りました。

しかし、どの金融機関からも良い返事を得ることはできませんでした。最後に頼った日本政策金融公庫から五百万円の融資が決まったものの、半年分の運転資金にしかならない金額で「焼け石に水」でした。それでもＩ氏は、わずかな資金を元手に、寝る間も惜しんで販路拡大に奔走しました。

ある日の経営者モーニングセミナーで、Ｉ氏は『万人幸福の栞』（以下、『栞』）の第十二条「捨我得全」を読み、背中に電流が走るような感覚を覚えたのでした。そこに記されていた内容が、自らの心の内を改めて見つめ直す契機となったからでした。

〈地位も名誉もプライドも捨てきれず、今の状況にしがみつこうとする執着が、事態の打開を妨げているのではないか〉と感じたＩ氏は、抱えていた問題の根本原因が、自分自身にあることに気づいたのでした。

その思いを妻に伝えると、妻は涙ながらに「やっと気づいてくれたのね」と、これまでＩ氏のプライドが邪魔をしていたことを指摘してくれました。この妻の言葉をきっかけに、Ｉ氏は「弱みを見せられない」という見栄やプライドを捨て、周囲と協力する姿勢を心がけるようになったのでした。

自分一人では解決できない問題が生じた時、周囲に助けを求めることで、社員と悩みや辛さを共有できる関係が生まれ、社風は次第に改善されていきました。さらに社員から寄せられるヒントや意見が、Ｉ氏の再起にとって大きな力となっていきました。

「病気の根本である心の暗影（生活の無理なところ）を切リ取ってしまって、朗らかなゆたかなうるおいのある心になれば、肉体は、自然に、すぐに、直ってしまうものである」　（『万人幸福の栞』）

『栞』の第七条「疾病信号」に書かれている通り、Ｉ氏は心の転換をきっかけに、次第に心身の健康を取り戻しました。

その後、Ｉ氏の飲食店は見事にＶ字回復を遂げました。今では自社商品が大手百貨店の店頭に並び、かつて融資を渋っていた金融機関も、再び支援に乗り出すようになりました。とりわけ、〈県外の顧客へ温かいアップルパイの味と香りを届けたい〉という思いから生まれた新商品「青森アップルパイの素」は、好評を博しています。

Ｉ氏は、「苦しい時こそ現実から目を背けず正対し、皆で乗り越えることが大切です。ピンチこそチャンスであり、その困難を乗り越えた時、その出来事は大きく成長させてくれます」と受け止め、前向きな気持ちで事業に取り組むようになりました。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局